

2021.7 no.90



一般社団法人 日本建築美術工芸協会



第一回日本建築美術工芸協会賞「東京都多摩動物公園昆虫生態園昆虫ホール」(写真提供：上哲夫)



上哲夫氏



オオムラサキ



テントウムシ トンボ



チョウ カマキリ クワガタ

日本建築美術工芸協会賞は、日本建築美術工芸協会目的に合う建築家、美術家、工芸家その他の人々の連携・協力によって優れた芸術的環境（建築・庭園・インテリアその他を含む）を創造した、あるいは優れた芸術的環境に関し多大な業績のあった個人またはグループが選ばれます。

#### 第一回日本建築美術工芸協会賞（1991年）

受賞作品 東京都多摩動物公園昆虫生態園昆虫ホール  
「大理石モザイク壁画、アナモルフォーシス」  
（東京都日野市程久保7-1-1）

受賞者 上哲夫 + 株式会社日本設計

昆虫生態園とは、世界的に著名な「蝶の翔飛を室内で四季を通じてみせる」ことを目的とした大温室を中央に、両ウイングに蝶の飼育温室、バッタの飼育温室、様々な昆虫をみせるテラリウムを配した、「昆虫の博物館」である。その導入部にあるのが、昆虫ホールの壁画とアナモルフォーシスで、前者はクワガタ、カマキリ、チョウ、トンボ、テントウムシをあしらった大理石モザイク、後者はオオムラサキをあしらったアナモルフォーシス（歪んだ実像を鏡に写すことによって、本来の形に戻す一種の遊び）である。

#### <選考委員講評>

- ・環境芸術賞にふさわしく、多摩の自然、丘状の起伏、緑の植生などを巧みに使って、建築それ自体が、昆虫の世界を連想させ、日常の感覚から、非日常の「昆虫」への期待と、迫る接点に、大理石モザイク壁画によるアートワークが程よく調和して、優しい独自の雰囲気を生み出しています。（宮本忠長）
- ・建築、美術、工芸の三方向から見て、昆虫館の本来の事業である昆虫を人々に親しんで貰おう、地球の自然を壊さないでというモットーにピッタリ符号しているのがよい。建築の内外の空間処理、造形の適格さは人々を昆虫の世界に誘うに充分である。特に上から見た表情は秀逸である。人の目を昆虫の目にしたてている。美術工芸について一言語ろう。まずは入口にあのモザイクがなかったらおそらく昆虫館の魅力は半分以下になったであろう。ようこそ昆虫館への言葉が聞こえる。題材を親しみのある昆虫達においたのも自然。建築、美術、工芸の一致した傑作である。（栄久庵憲司）
- ・入口に入り、壁面と床の、大理石モザイクによる造形をながめる。クワガタ、テントウムシなどが、それぞれ個体に分けられ、額縁ふうにならべられている中で、トンボの造形が、大理石の切片と目地の鋭い構成をみせ、緑石の複眼が秀逸だった。鏡面仕上のステンレス円柱への床・壁の映り込みも、都会ずれの嫌味なく成功している。建築とアートとクラフトが、芸術性よりも親密性による程よいバランスで出合っているのがよく、来園者との環境的なコミュニケーションの質がこの作品を協会賞に推すところとなった。（三輪正弘）



## CONTENTS

### ■2021年度通常総会

2021年度通常総会	4
2021年度協会組織図	6
東條隆郎新会長 就任挨拶	7
第30回日本建築美術工芸協会賞表彰式	



▶▶ 7

### ■時代の華一輪

AACA賞への思い	可児才介	8
-----------	------	---

### ■AACA賞の今を訪ねて

東京都多摩動物公園昆虫生態園昆虫ホール	広報委員会	10
---------------------	-------	----



▶▶ 10

### ■AACA 賞及び各賞受賞者による「会員活動レポート」

鈴木幸治	12
------	----

### ■会員活動レポート

様々な表現手段で	犬飼三千子	14
我が今昔の譜	甲谷 武	15
2020年、コロナ禍でのアート活動	長沢晋一	16
コロナ禍における渋谷東急、池袋東武での個展とaacaサロン	水谷誠孝	17
「土」と「手」と「心」と。～ 個展「掌(ナオノテ)」に寄せて	須齋尚子	18
絨毯に見る日本の文様の記憶	ミーリー工房とソレマニエ・フィニイ工房展	
	ソレマニエフィニアミール	19



▶▶ 22

### ■連載 (4回連載)

新しい生活文化への提案 —閑室・藤焼・床の間—	松隈 章	20
-------------------------	------	----

### ■法人会員の設計事務所を訪ねて

株式会社山下設計 part2	広報委員会	22
----------------	-------	----



▶▶ 24

### ■母校を訪ねて

東京工業大学 大岡山キャンパス	北 典夫	24
-----------------	------	----

### ■会員増強委員会だより

第3回aacaサロン開催報告	山極裕史	26
----------------	------	----



▶▶ 27

### ■フォーラム委員会だより

第197回フォーラム開催報告	藤田あかね	27
----------------	-------	----

### ■事務局だより

28
----

## 2021 年度通常総会

# 2021 年度通常総会

●開催日	2021年6月10日(木) 午後2時00分～	●会員総数	355名(個人会員252名・法人会員103名)
●場 所	建築会館大ホール	●総会成立定足数	237名
●議 長	岡本 賢(会長)	●出席者数	315名(出席者44名、議決権行使書・委任状提出271名)
●議事録署名人	理事(令和1・2年度)の内、当日出席理事全員		
●進 行	立石博巳(会員・総務委員会副委員長)		

### 岡本会長 挨拶



皆様、こんにちは。令和3年度 AACA 総会に緊急事態宣言の中お集まりいただき感謝申し上げます。WEBで参加されている方もおられますがその方々にも感謝申し上げます。

このような変則な形の総会も、昨年と同じようなかたちで行いましたが1年で終わるかと思いましたが、今年もこのように変則的な形で行う事になってしまいました。このあとの交流会も中止となり寂しい話で残念に思います。

当協会の活動は会員の皆様が自発的に色々な企画を立てて情報発信することが一番の存在価値となりますが、コロナ禍の中で充分活動できない事が続いておまして残念な状況であります。その中でも色々知恵を絞っていたいて、WEBでシンポジウム、WEBとリアルで講演会・シンポジウムを行なうなど、様々な活動を続けています。残念ながら街中ミュゼなどの活動は案件がそろわず、またシンポジウムは集客がかなわず厳しい状況であります。その中でも昨年コロナの影響で地方へ移転するような社会現象がおきてくる状況がありまして、それをテーマにした3回連続の講演会を実施しました。その講演会を足掛かりとして建築家 隈健吾さんを中心としたシンポジウムが実施されました。その記録をまとめて出版しようという事業が継続され、今後数週間の内に実施される事になっております。

また協会の柱であります、異業種交流が大きな要素であります。交流会、名刺交換会などが実施されず、また建物視察会・芦原義信記念ゴルフ会等も中止されました。

今年の秋にはコロナワクチン接種もゆきわたり現在の状況も元通りになり再開できると期待しておりますが一日も早く抜け出して、活動できるよう念願しております。

令和2年度の決算はこのような状況で厳しい結果となりまして、はじめて赤字決算となりました。コロナの影響で事業が実施できずやむをえない状況ではありますが、額は大きなものではありませんので、これから今季・来季に向かって様々な活動が再開され、また普通の状態に戻る事となると信じております。今季の内容については後程ご審議いただきますがそのような状況であることを報告いたします。

多くの事態を乗り越えなければならない結果でございますので、次期からは新しい陣容で業務を進めていってほしいと考えます。議案のなかで決算を含めてご審議いただければ幸いです。よろしくお願いいたします。



## 審議

第一号議案・令和2年度事業報告に関する件を東條専務理事、第二号議案・令和2年度貸借対照表、正味財産増減計算書、財産目録及び取支計算書に関する件を、石田事務局長より原案説明があり、また森田監事より2018年度の会計及び業務について監査報告がなされ、議長採決の結果第一号・第二号議案は原案どおり満場一致にて承認された。

第三号議案・長期会費滞納会員の処遇に関する件も原案どおり議長採決により満場一致にて承認された。

第四号議案・令和3年度理事・監事の選任について議長より提案があり採決により原案どおり満場一致にて承認された。

理事 石田真人、岩井光男、尾崎 勝、亀井忠夫、  
清野明男、川口 晋、坂上直哉、芝山哲也、  
菅 順二、中野恵美子、中村弘子、東條隆郎、  
日置 滋、福田卓司、本 耕一、松村正人、  
森 暢郎、山本茂義、米林雄一、和出知明、

以上 20 名

監事 森田高年、山崎和子、 以上 2 名  
以上をもって 令和3年度通常総会の審議は滞りなく終了した。

(事業報告・決算報告は、協会ホームページに掲載)

## 報告

報告、3月27日開催の令和2年度第六回理事会にて決議された、令和三年度事業計画・事業予算書について石田事務局長より報告された。

(事業計画・事業予算は、協会ホームページに掲載)

岩井副会長の挨拶により終了し散会となった。

## 2021 年度 第二回理事会

## &lt;令和3・4年度役員を紹介&gt;

会 長	東條隆郎	建築家
副会長	岩井光男	建築家
同	森 暢郎	建築家
同	米林雄一	彫刻家
専務理事	和出知明	(株) 梓設計
常務理事	芝山哲也	(株) ヴィジブル・ヴィジョン代表
同	本 耕一	建築家
理 事	尾崎 勝	鹿島建設 (株)
同	亀井忠夫	(株) 日建設計
同	川口 晋	(株) 大林組
同	清野明男	(株) 佐藤総合計画
同	坂上直哉	美術家
同	菅 順二	(株) 竹中工務店
同	中野恵美子	工芸家
同	中村弘子	工芸家
同	日置 滋	東京工業大学
同	福田卓司	(株) 日本設計
同	松村正人	大成建設 (株)
同	山本茂義	(株) 久米設計
同	石田真人	事務局

以上 20 名

監 事	森田高年	森田事務所
同	山崎和子	工芸家

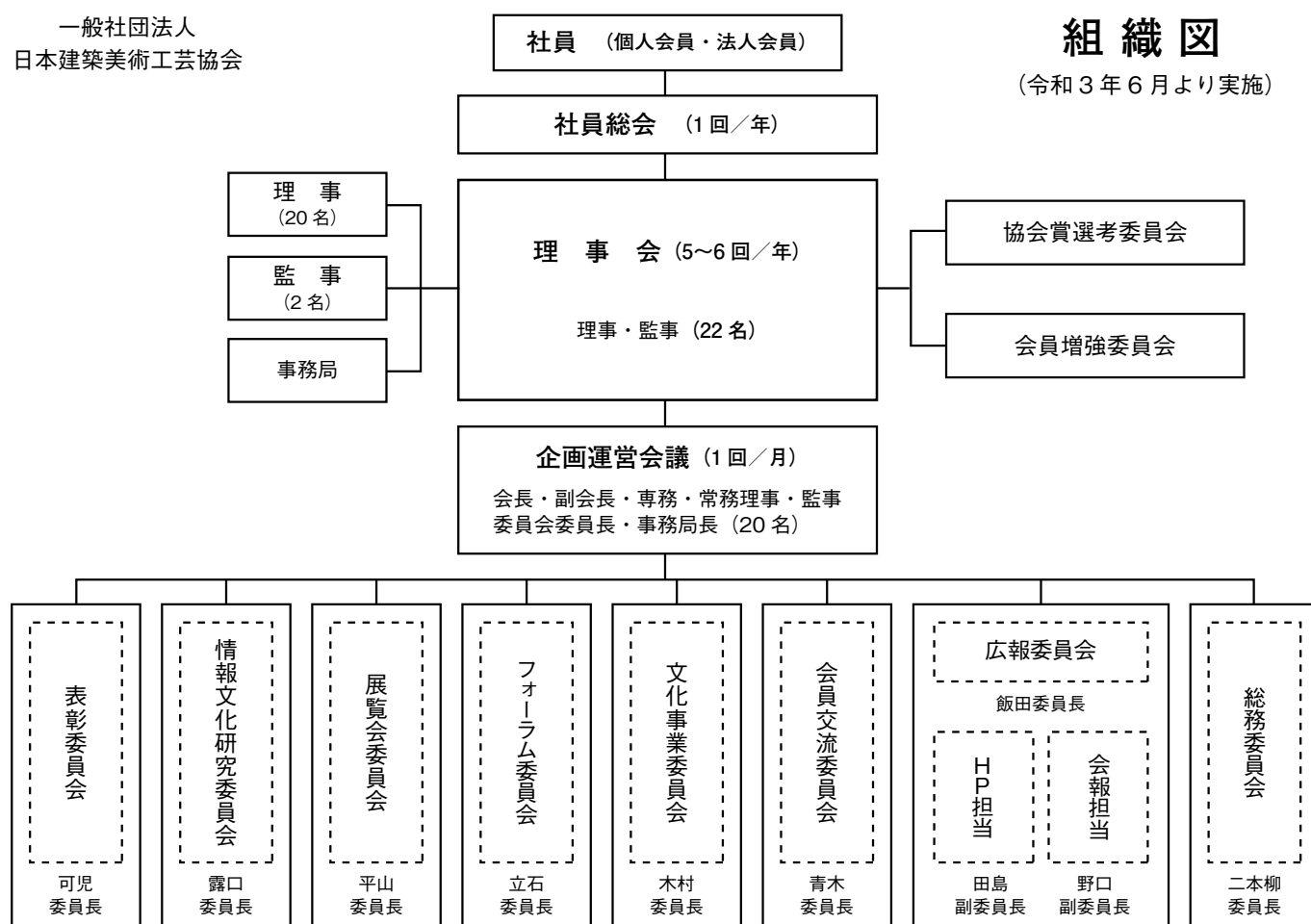
以上 2 名

## 2021 年度協会組織図

一般社団法人  
日本建築美術工芸協会

## 組織図

(令和3年6月より実施)



令和3・4年度協会組織図 (令和3年6月10日決定)

### ◎常置委員会

#### ・表彰委員会

委員長 可児才介、

#### ・情報文化研究委員会

委員長 露口典子、  
副委員長 高橋圭太郎

#### ・文化事業委員会

委員長 木村慶太  
副委員長 小谷純造、島本健司・  
堀 剛・杉山成明、  
高柳登美、向 利也

#### ・会員交流委員会

委員長 青木 崇  
副委員長 白石健二・高根喜一郎、

#### ・展覧会委員会

委員長 平山健雄、  
副委員長 松田静心

#### ・フォーラム委員会

委員長 立石博巳、  
副委員長 田島一宏

#### ・広報委員会

委員長 飯田郷介、  
副委員長 野口真理 (会報担当)、  
〃 田島一宏 (HP 担当)

#### ・総務委員長

委員長 二本柳 敏、  
副委員長 立石博巳

### ◎特別委員会

#### ・協会賞選考委員会

委員長 古谷誠章  
副委員長 可児才介

#### ・会員増強委員会

委員長 芝山哲也  
副委員長 松本哲哉



## 東條隆郎新会長 就任挨拶



この度、aaca 会長に選任いただきました。謹んで会長職をお引き受けいたします。今はその重責に身の引き締まる思いでおります。

当協会は 1988 年に創立、多くの諸先輩方、会員の皆様に支えられ、2018 年には創立 30 周年事業を展開し、現在は 33 年目になります。協会は「文化的都市環境づくりを実現するために、建築・美術・工芸・造園に関わるあらゆる分野の人々が集まり、お互いに情報を交換し、連携・交流を深め、会員の質の向上を図る。その目的のために、文化と芸術性の追及と情報の発信など様々な活動を行い自己研鑽に努める」という理念を基に、aaca 賞、講演会やフォーラム、シンポジウム、展覧会などの活動や発信をしまいいりました。

残念なことに、昨年から新型コロナウイルスによる感染が拡大し、現在 3 度目の緊急事態宣言が出ています。人々

のリアルな交流や移動が制限されるなどたいへん難しい日常となっています。当協会の活動も制約を受け、中止される活動もありましたが、aaca 賞をはじめとして、BOX 展、会場参加だけでなくオンラインも活用しての講演会、シンポジウム、フォーラムやサロンなど、会員皆様の大変なご努力により実施することができました。

ようやく新型コロナウイルスワクチン接種が始まり感染の収束が期待されます。都市環境や建築環境が長い閉塞感のある状態から解放され、これまで以上に協会の理念である「文化的な環境、アート芸術と一体となった都市環境・建築環境をつくる」ということがますます重みを増していくのではないかと思います。

協会は会員皆様が自由に平等に活躍する場であり、会員皆様とともに、様々な活発な交流や情報発信などの活動を通して aaca のさらなる発展のために全力を尽くしてまいります。どうぞよろしく願いたします。

## 第 30 回日本建築美術工芸協会賞表彰式



受賞者集合写真

通常総会に引き続き、コロナウイルス感染防止のため延期されていましたが第 30 回日本建築美術工芸協会賞表彰式が行われました。表彰式には、会場対面参加 18 名、オンライン参加 4 名のご参加をいただきました。

表彰式後、受賞者からのプレゼンテーションが行われ、今回はオンラインによりインターネットで配信されました。

## 表彰式出席者

- |          |   |
|----------|---|
| AACA 賞   | 青木淳・西澤徹夫設計協同体<br>西澤徹夫、高橋匡太  |
| 芦原義信賞    | 藤森雅彦建築設計事務所<br>藤森正彦、小池佑樹  |
| AACA 優秀賞 | 水上哲也、森田千尋<br>(株) 梓設計 日比淳、森一広<br>納谷建築設計事務所 納谷学   |
| AACA 奨励賞 | (有) マル・アーキテクチャ<br>高野洋平、森田祥子 (オンライン参加)<br>坂東幸輔建築設計事務所 坂東幸輔<br>(株) 日建設計 多喜茂、甲斐圭介<br>(オンライン参加)<br>藤村龍至 /RFA + 林田俊二 /CFE<br>藤村龍至、武智大祐 |
| AACA 特別賞 | (株) 日本設計 福田卓司、塚川讓   |
| 美術工芸賞    | UDS (株) 富山晃一、渡瀬育馬   |
| 美術工芸賞奨励賞 | 『チーム：アート★よつくら』<br>川辺晃、中村茂幸 (敬称略)  |

# AACA 賞への思い

表彰委員会委員長  
AACA 賞選考委員会副委員長

可児才介



AACA 賞の表彰も回を重ねて、昨年 2020 年で 30 回を数えました。AACA 賞は他の建築関係の賞に比べて独特の個性あふれる性格を持っています。それは初代芦原義信会長が初期段階で綿密に作り上げ示し続けた、賞に対する強い意識によるものだと確信します。賞の在り方や行き先は 30 年たっても全く揺らぐことがないのです。

私は幸い、AACA の 30 周年にあたって発行された記念誌に、AACA 賞の歴史について寄稿する機会を得ました。そのため過去のすべての会誌等を見ながら生い立ちから調べました。はっきり見えるのは、当時芦原会長が前身の組織（建築美術工学協会）の時代から時間をかけて温めてきた、しっかりした構想に基づいて、まさに満を持して作られたのがこの AACA 賞であったということです。詳しい経過はぜひ記念誌をご覧くださいなのですが、その内容の中に興味深いことがありました。芦原会長が前身の組織時代から「吉田五十八賞」の審査員をやっておられて、会誌の創刊号では吉田五十八賞の受賞作「サレジオ学園」を特集する編集になっていたのです。芦原会長は吉田五十八賞にどうやら AACA 賞の原型を見出しておられたのではないかと、また AACA の目指す方向性についても同様に考えておられたのではないかと、いうことを強く感じます。さらに続けますと、同じく審査員であった村松貞次郎氏が吉田五十八賞について「従来の建築賞とは違って、建築と建築関連美術の近來たぐい稀な成果としてサレジオ学園が受賞した」と述べておられることもまさに現在の AACA 賞に根付いている考え方を示しています。建築のデザインだけを対象とするのではなく、芸術家たちの成果を含めて、さらにはものづくりに参加した職人の方々さえも評価の対象に

するという、きわめて幅の広い賞の在り方を考えておられたのだということがよくわかります。そして「優れた芸術的環境を創造した個人またはグループを表彰する」という極めて簡潔な定義が全てを物語っているのではないのでしょうか。

私が初めて AACA 賞に出会い、同時に AACA そのものに触れたのは 1994 年でした。当時私の設計グループで進めていた北海道の「生活工房・サッポロファクトリー」というプロジェクトが完成し、担当のアーキテクトが「ぜひ AACA 賞に応募したい、まさにこの作品にぴったりの賞です」と私に言ってきたのです。この作品は企画段階から建築だけではなく多くのアーティスト達が参加し「芸術的環境」の中に市民の場所を作ることが大きな目的になっていました。確かにぴったりだ! ということで応募しました。当時の審査員だった近江栄さんや内井昭蔵さん、仙田満さんといった錚々たる建築家の皆さんが現地審査に来られて懸命に対応したことをよく覚えています。結果として AACA 賞特別賞をいただきましたが、驚いたのが賞牌でした。向井良吉さんのデザイン制作による、脈動するような素晴らしい作品です。今思えばその年が第 4 回で誕生間もない賞であったことがわかりますが、賞をいただいた時はもっとうずと長い歴史があるものだと感じておりました。

そんな私が 2005 年に選考委員のお役目をいただき、2011 年には表彰委員会の委員長を拝命して、以来 AACA 賞の運営に深くかかわることになりました。いざ運営側、審査側に立ってみると、さらにこの賞のユニークさ、面白さが伝わってきました。選考委員会の審査の中では常に AACA 賞に相応しいかどうか議論になります。一般の建築の作品



現地審査風景（伊根の舟屋）



現地審査風景（近畿大学 ACADEMIC THEATER）



賞であれば必ず入賞できるような優れたデザインの作品であっても、AACA 賞のフィルターにはどうしてもかからないことが多分に生じます。面白いのはあえて AACA 賞とは何かという基本的な原則についての議論はほとんどないということです。選考委員の一人一人が自然に賞の理念について共通の理解を持っているのです。一見不思議な感じがしますが、それだけ芦原会長の作った理念がわかりやすく筋の通った強いものだったということを表しているのだと思います。

第 30 回の 2020 年は歴史的な年になりました。私たち現代の人間が初めて経験する感染病禍です。先人の方々はスペイン風邪などを経験していますが、今は第二次世界大戦ですら経験していない人たちが大多数を占めるようになりました。そんな年に行われた AACA 賞はまた特別な賞になったという感慨があります。

一つは、応募者の数です。第 1 回は特別（93 作品）な状況であったので除くとして、今回は第 2 回以来最も多い、77 作品の応募がありました。

二つ目は、現地審査です。選考委員会で話し合っ、少人数でも実行しようということになったのです。リスクを冒してでも応募者のためには行くべきだという結論に至った理由は、やはり審査における現地審査の重要性です。写真や文章だけで審査する第一次審査では、拮抗する作品同士のわずかな優劣の差を計るには情報量が圧倒的に少ないのです。現地でその場の空気や視界に入る環境、香りや光、空間を通じて感じとれるアートの存在感、肌で感じる質感、数え上げるときりがありません。その場に立っただけで感動することもありますし、こんなはずではなかったという

ガッカリ感も経験しました。アートだけの応募作品を見たことがあります、その場に立っただけでオーラを覚えました。昨年の結果を見て、現地審査は第一次審査の結果に上積みされる追加評価情報として極めて有効に機能したと感じました。

三つめはオンラインです。一次審査ではロンドンからの来日できなかった選考委員がオンラインで審査会に参加しました。応募作品のデジタル情報は全委員に配布されますので、ほぼ同じレベルの情報が共有できます。結果、いつもと同じ密度の審査が行われました。さらに公開されている最終審査会では、審査側は全員会場に出席しましたが、応募者側では都合で会場に来られなかった 1 組がオンライン参加しました。また公開は、会場が無観客、一般の視聴者はオンライン参加となりました。これも例年と何ら変わらない状態での運営になり、これからの可能性を示してくれました。また例年行っている前年度の受賞者を紹介する「つどい」についても、2020 年ではオンラインで開催しました。なれないための不具合はいくつか発生はしたものの、これからの催しの在り方に一石を投じました。これまでは AACA の活動は、ある意味東京ローカルのものであったのですが、今後は全日本レベルの活動に広げていくことも現実的な状況になりました。

今年 2021 年も例年通り AACA 賞の募集、審査、表彰を行います。コロナ禍の中で作品創りに弛まぬ努力を重ねている多くの建築・美術・工芸の作家の皆さんからの応募を期待しています。今年もさらに「優れた芸術的環境を創造」する作品を掘り起こしていきたいと考えています。



公開審査風景（2019年11月1日）



公開審査風景（2020年11月14日）

# 東京都多摩動物公園昆虫生態園昆虫ホール (大理石モザイク壁画、アナモルフォーシス) 上 哲夫

広報委員会

### モザイク作家人生の記念すべき仕事となったAACA賞受賞作品

昆虫生態園昆虫ホールの制作にあたり上哲夫氏は、昆虫を中心とした命の場を意識されたそうで、床に描かれた国蝶の雌雄のオオムラサキが鏡面の円柱に描き出されるアナモルフォーシス（歪んだ実像を鏡に写すことによって、本来の形に戻す一種の遊び）によって宙に舞っています。今回の制作で一番ご苦労されたのは、このアナモルフォーシスの部分で、映し出される像が見る位置によって変わり、また大人の視線、子供の視線といった高さによっても見え方が変わってくるということでした。そこで十分の一の模型を作り検討されたそうですが、制作現場では、鏡面仕上げのステンレス柱を始めに設置していただき、床にベニヤ板を貼って、柱の鏡面を見ながら床に蝶の絵を描き、その蝶の形にベニヤを切り抜いて、そこに蝶のモザイクを施し、さらに周りのベニヤをとって、蝶の周りのモザイクを現場で石を切りながら制作が行なわれましたが、この頃から石が自由に割れるようになったそうです。

上氏は、いつも自分一人ではなく7、8人の作家さんたちと一緒に制作をされるそうですが、昆虫ホール壁面のクワガタ、カマキリ、チョウ、トンボ、テントウムシのモザイクは、メンバーの一人が一つを制作される中、オーケストラの指揮者のような立場で、それぞれの作家さんの個性を引き出すことにも注力されているそうです。そして、この49歳の時の昆虫生態園昆虫ホールの仕事は、上氏のその後の人生・作風にとって、ターニングポイントとなり、記念すべき仕事となりました。

### 石を割った瞬間が美しいーそれからモザイクの世界へ

上氏は、東京藝術大学の油絵科で絵画を専攻され、小磯良平教授の下で学ばれましたが、大学3年の時に行われた集中講義で、矢橋六郎教授の壁画の授業を選択したことがモザイクを始める動機になったそうです。その授業で初めて石を割った瞬間、「石は、中間色で濁りがなく、絵具より石の方が美しい」と感じ、あの時の感動は今でも忘れられないそうです。そして「描いたものに力がある、これを絵具として作ってほしい」と決意されたそうです。

東京藝術大学絵画科を昭和42年（1967）に卒業、同大学院絵画組成研究室を昭和44年（1969）に終了されますが、昭和43年（1968）から5年かけて行われた迎賓館赤坂離宮の昭和の大改修の天井画修復に27歳で参加されました。東京藝術大学寺田春武教授（洋画家、絵画修復家）の下で天井画修復に携われ、「花鳥の間」、「朝日の間」、「羽衣の間」などすべての天井画に毎日十数人くらいの学生と取り組まれたそうです。そ

して4年間の天井画修復の仕事の後、30歳の時にラベンナ・モザイク国際センター（イタリア）にてサリエッティ教授の指導を受け、さらにヨーロッパ、中近東、インドなど20か国を10か月かけて精力的に回られました。美術館を巡りながら「絵画はありすぎるほどある。自分はもう絵を描いてもしょうがない。この先自分は何をやるのか」と思った時、「表現するならば社会との接点が多い仕事をしたい。絵画は美術館の中に納まってしまいが（外部にある）壁画はいやでも見てもらえる。モザイクには様々な可能性がある」とモザイク作家としてやっていこうと気持ちが固まったそうです。しかし、10年間はモザイク制作の仕事がなくアルバイトで食いつないだそうですが41歳の時、5匹の鹿を描いた善光寺大勧進護摩堂（長野市）のモザイク壁画「菩提樹」の制作からモザイク一本で生きられようになり、47歳で株式会社大理石モザイク・上を設立されました。

### 建築の中で、作品により建物自体が別の命を生み出す

40歳代の頃は、毎日毎日モザイクに取り組む日々でしたが、徐々にマンネリを感じるようになり、同じ創作の繰り返しをしていると思われるようになったそうです。そして、50歳になった頃「見えるものの向こうにある世界を感じることや人間は魂を持った存在であるという世界観を高橋佳子氏との出会いによって知り、大変な衝撃と共に新たな創作への扉が開かれたそうです。縁あって壁画の創作に関わる時はいつも与えられた場で何をやるのか、建物の空間に入り、その空間が何を求めているのかを考えてイメージを固めて制作にかかるそうです。この頃の作品の東松山市総合会館「目覚めの塔」(1992年)では東松山市民に呼びかけた目覚めの塔ですが、「自分自身への呼びかけ」でもあったようです。また「神奈川県立生命の星・地球博物館」(神奈川県小田原市、1995年)の天井壁画は、建築の中で、壁画と建物がうまく響き合せて新たな命を生み出すことができたと思われたそうです。

いつもその場が何を求めているのかを考えて制作にかかるため、発注者に原画を見せながら「この通りにはつくりません」と断って現場で考えながら創られるそうです。石のモザイクは手の温もり、心の温もりが感じられ、人を融和させる不思議な力を持っているので、石を使っただけの創作活動の後には、心が穏やかになり、とても癒されるそうです。



モザイクアートには、人間らしい生き方の原点があります

石などの自然素材と直接触れ合うモザイクアートは、太古からのアートでありながら、もっとも未来的なテーマを宿しています。石を砕き、その1ピースをつなぎ合わせることによって、それまでの石がもっていた世界とはまったく異なった新しい世界が表れてきます。

かつて、目に見える具象の世界しか表現できなかった私も、この世界を支える物質と精神の次元があるがままに観るまなごしを育むことによって、新-たな創作へと転換することができたと思っています。

創造とは、大いなる存在の気配と響きあうことから精神が喚起され、その衝動を創作の源流に生み出されたもの。この壁画の前に立つと、何か心の濁りが払われる。普遍的な大きな力によって支えられていることを感じ、なんだか元気になる。そう言っていただけの作品を創り出したいと、いつもそう願っています。

上 哲夫

(飯田郷介 松本治子)



飛翔  
富山自遊館／富山県富山市  
モザイク壁画



菩提樹  
善光寺大勧進護摩堂／  
長野県長野市  
モザイク壁画



六力六態 神奈川県立生命の星・地球博物館／  
神奈川県小田原市 天井壁画



アンモナイト 神奈川県立生命の星・地球博物館  
板石構成壁画



大地 神奈川県立生命の星・地球博物館  
立体造形モザイク



TOMORROW 浜松アクトシティ／静岡県浜松市  
フロアモザイク



響きあって未来 富山市庁舎／富山県富山市  
モザイク壁画



目覚めの塔 東松山市総合会館／埼玉県東松山市  
立体造形モザイク



# AACA 賞及び各賞受賞者による「会員活動レポート」

## 30 回を迎えた AACA 賞



建築家  
株式会社 ナウハウス  
日本建築美術工芸協会会員  
鈴木幸治

ナウハウスは浜松の建築事務所です。1981年に開設し現在に至ります。

「隙屋」で第7回芦原義信賞、「WOOD（ずだじこども園）」で第22回 AACA 奨励賞を受賞しました。

AACA 賞に育てていただきました。

実はコンペに応募するまで、私は AACA 賞を知りませんでした。

この賞の理念は、建築・美術・工芸の力で人々に感動を与える美意識に支えられた環境や空間に与える。なるほど、ナウハウスは AACA とは縁があったのだと思いました。なぜなら、「ナウハウス」は文字通りパウハウスからの着想であり、時代に付いていこうという意志と、建築と美術をつなげようとする思いがあったからです。

私は学生時代を名古屋の大学で過ごしました。建築学科では「モダニズム建築」にどっぷりと浸かっていました。モダニズム建築とは様式建築に対して、装飾を廃し合理性や機能性を追求した、単にシンプルな建築だと理解していました。

モダニズムが生まれた社会的背景には、産業革命により世界が工業化社会に変わっていく過程があります。しだいに一般市民の生活は豊かで多様になり、社会改革や都市改造が必要になってきました。鉄筋コンクリートや鉄骨などの新技術が、建築の形を変えました。モダニズムは普遍性を求めて、地域性や民俗性を軽視することもありました。

理念が建築を支えていることが、モダニズムの特徴です。

さまざまな国にモダニズムがあり、「パウハウス」はドイ

ツのモダニズムでした。パウハウスには、芸術と工芸を見直し新たに統一し、調和のとれた造形の集大成として「建築」がありました。

専門課程で西洋の歴史意匠の研究室に入ると、教授から卒論のテーマとして、パウル・クレーの「造形思考」を与えられました。私が絵に興味があり、数多く見ていたことで、決められたようでした。大学に入ってから印象派以前の絵画もよく見ていて、芸術論も読んでいました。未見の絵も、画風でおおよそ見当がつかしました。また画廊や団体展の展覧会では、作者からよく話を聞いていました。

さらに絵を実作し、絵画という空間に絵の具という物質を馴染ませ、意図をもって空間をつくる実験をしていました。

あるときから、絵画の見方が知識より自分の直感に委ねるようになりました。私にとっておもしろいか否か。同時に、自分の感動が本物であるかも疑っていました。

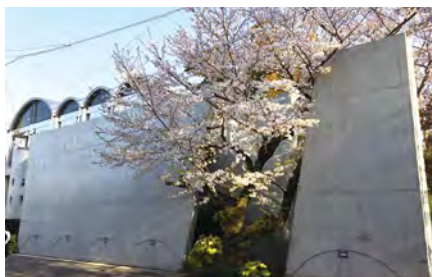
本当に分かっているのかの問ひかけは、今も続いています。

当時、建築の世界でも難解な哲学が語られ、研究室内もりっぱな理論の先に名建築があるとの風潮でした。いい建築には理論が必要だ、と私も理屈っぽい本を読み友人と議論を重ねていました。しかし、実務の戦場を知らず生みの苦しみを知らない人に、啓示などありませんでした。

読んだ一冊が「芸術に隠された秩序」でした。ルビンの壺の例を挙げ、「画家の眼は、図と地を等価に見て、図と地を自由に入れ替えて見ることができる」ことの指摘があり、実際に自分がそのように絵を見ている事実に驚きました。この



1985 ナウハウス



1990 鹿谷の家 桜の象嵌



1998 頭陀寺の庭



1985 ナウハウス 中庭



1990 鹿谷の家



1998 頭陀寺の庭 墓地入口

指摘は重要でした。建築は外観から想像できない内部空間を持つことができ、それが建築の豊かさにつながると思います。

パウル・クレーはバウハウスのマイスターです。「造形思考」はクレーのバウハウスでの講義録です。点、線、面、立体、並行関係などの絵画の構成要素の羅列で、クレーの解説がない限り無味乾燥で退屈なものだと思いました。

一方クレーの絵は「造形思考」とは一転し、どの絵もおもしろい。空間が命を得て、生き生きと世界が広がっています。何かが心を動かしている。「造形思考」とクレーの絵のなんという違い！飛躍が芸術の瞬発力であり、言葉がなく「感性で感じるしかない」ところです。クレーが絵を描くように、心を動かす建築を作りたい。

私はバウハウスを学生時代だけのできごとでなく、事務所を「ナウハウス」とし、自分なりに芸術と建築をつなげ、現代に生きる建築のありかたを考えました。

そして「建築にしかできないこと」を考え続けました。

設計の実務に入ると、設計条件を選ぶことはできません。しかし、しだいにその制約の中で建築を作ることこそ、飛躍のチャンスだと思うようになりました。

そこで思い出したのが「芸術に隠された秩序」の「画家の眼」についての指摘でした。「図と地を等価に見ることができる」のが画家の能力です。悪条件のポジとネガに注目し、悪条件のネガをポジに見立てるのです。たとえば、飛行機が空気という抵抗を浮力に変え利用して空を飛んでいるように、です。

建築の制約は克服すべき要点であり、価値ある鉱脈になる可能性があります。これを「離陸の設計」と名づけ、「禍を転じて福となす」ことにしました。

設計者は、設計条件をポジティブに読み替えればいいのです。

1990年の「鹿谷の家」は、鋭角三角形の敷地に街路樹のサクラが侵入し、突き抜けています。あえて「桜の象嵌」を残し、自然と人工物のせめぎあいの景観を作り、サクラの名所として近隣の安堵と共感を得ています。

2007年の「隙屋」は、簡素だが豊かさをしみじみと感じられる住まいです。

時代に逆行しますが、設備より建築、建築より「人間の感性」に重きを置きました。クライアントは、暑さ寒さを受け入れることは決して「ただの我慢」ではなく、人間が生き抜くうえで必要だとの考えでした。温暖な浜名湖の環境を生かして、自然との間に強い境界をやめました。

空間は触媒として感性を刺激し、会話が弾んでいます。

建築にはクライアントの要求、予算、固有の土地の特性、環境といった地域性などの現実があります。「隙屋」の力強さは、「離陸の設計」で現実に立ち向かい、インスピレーションを得て工夫した賜物です。かつてモダニズムで排除された環境や地域性が、「隙屋」ではデザインの源となっています。

モダニズムの普遍性が一歩進みました。



2005 おおりの眼科クリニック



2007 隙屋



2001 ZODD (ずだじ幼稚園)



2005 おおりの眼科クリニック エントランスへ



2007 隙屋



2012 WOOD (ずだじこども園)



# 様々な表現手段で

造形作家  
日本美術家連盟会員  
CAF・N会員  
日本建築美術工芸協会会員  
**犬飼三千子**



一回り以上年上の姉が、美大受験のために絵を描いている傍らで、3歳の時に描いた油絵が、私の作品1号だと思えます。それから高校二年生まで、絵が好きで美大に進学することを考えていたのに突然、芸術家は自己満足で、社会に貢献していないという思いに駆られ、三年生で進路変更し、社会学を専攻しました。しかし、感覚的な人間には、論理的な学問は所詮無理なことで、大学生活は、美術研究会の活動をしていた記憶が多いです。

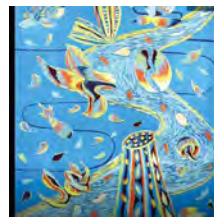
紆余曲折を経て、本格的に展覧会で発表を始めたのは、30歳を過ぎてからです。美術の専門教育を受けていないので、門前の小僧で覚えた知識だけで、それからは、猪突猛進で制作してはコンクールや展覧会で発表しました。その頃の思い出は、名古屋デザイン博に水辺のインスタレーションとして参加したことです。その後30数年前に銅版画を、25年前に木版画を学び、版画作品も制作を始めました。

最近の活動は、アクリルの大作は、隔年、埼玉近代美術館のCAF、N展に出品しています。版画、アクリル画平面立体、仮面の作品を年間20ほどの展覧会に参加出品しています。機会があれば、野外展にも挑戦します。印象深かったのは、文化庁と総務省の助成を受けて花巻市で開催された「アート@つちざわ<土澤>」で、町の古い鎬八幡神社の本殿と正面と側面に私のキャンバス地に描いた作品を飾れたことです。他に、横浜市舞浜の野外展に数年前まで毎年参加し、住民の方々と交流しました。海外では、韓国の現代美術の作家達との交流展やスペインの版画展に出品しています。一番力を入れている個展は、隔年銀座のギャラリーオカベで、毎年新宿ゴールデン街の画廊バーでしていました。しかし、50年以上続いた老舗オカベは、

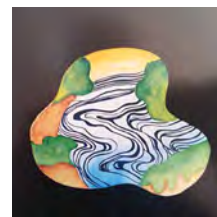
昨年5月新型コロナの影響で、閉廊してしまいました。

作品の発表ではありませんが、美術家として川崎市の文化芸術振興会議の委員をしています。任期9年の6年目に入っていますが、大学教授や経済人の方々と川崎市の文化事業や文化施設のアセスメントをしています。民家園や映画「シン・ゴジラ」やテレビドラマなど映像への撮影地提供についてなど、面白いアセスメントもあります。川崎市民ミュージアムが、アセスメント中に台風で、水没被害にあったのは、衝撃でした。地下の倉庫で、沢山の世界の珍しいポスターやこれから整理するという大量の戦前の映画フィルム等を見たばかりでしたので、20万点以上の水没した収蔵品のどれくらいか、修復できるのか心配です。

昨年は、新型コロナの影響で多くの展覧会が中止になり、また、開催しても入場者が少なく、美術関係者には、打撃的な年でした。今年はなるべく早く普通の活動ができるように戻ることを願っています。



往にし方



流れ



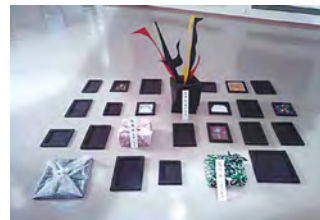
鎬八幡神社



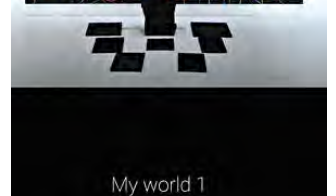
森で遊ぶ



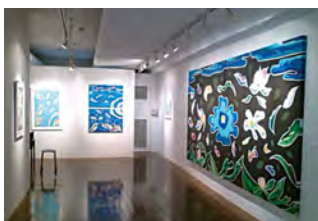
森の中へ



捧げ物



merge



ギャラリーオカベ個展会場



鎬八幡神社



鎬八幡神社



## 我が今昔の譜

モダンアート協会会員  
日本美術家連盟会員  
CAF・N協会会員  
日本建築美術工芸協会会員  
**甲谷 武**



今は昔、10年ひと昔と言う時代に時は1985年に遡る。東京銀座セントラル美術館に於いて、新進作家育成目的で当時30歳代で公募展各会派、無所属作家の中から評論家諸氏により27名の作家を選抜『セントラル85展』が開催された。私も選考された作家の一人であったが、全員150号2点の大作展示は新鮮で、緊張感の漂った展覧会場であったと記憶している。

同展覧会は3年間継続された。この時代はいくつものコンクール展の盛んな時代、新人の登竜門と言われた毎日新聞社主催の「現代日本美術展」に私も応募したが、この年85年は佳作賞・富山県立近代美術館賞を受賞した。更にインドニューデリー国立近代美術館主催の「現代日本絵画展」にも推薦され出品することが出来た。

翌年'86年は横浜そごう美術館開館記念展「ザ・メッセージ現代日本絵画83人展」にも選ばれた。出品作家は国際的にも著名な作家ばかりで、私には幸運な時代であった。

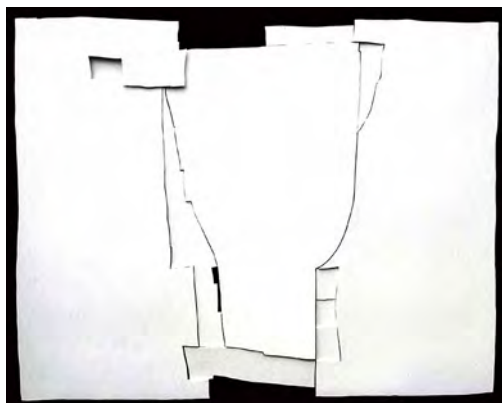
セントラル展は'87年をもって終了したが『作家自身の連帯の中から、展覧活動の「今日」を提示する活動』として30名の作家が集い、マンネリ化を避けるため'88年より3回展で終了する趣旨で「絵画・・・今」を結成。会場は京都市立美術館、三重県立美術館、埼玉県立近代美術館に設定して'90年まで開催した。'89年には現代日本美術展に於いて三重県立美術館賞を受賞、新たに埼玉県立近代美術館でのコンテンポラリーアートフェスティバルの設立にも参加。現在はCAF・N展に変更されている。'90年代後半には湘南セミナーハウス建設に伴い壁画制作の依頼があった。縦2m横4mの作品を制作、私の作品では最大で他

に130号,150号が常設展示されている。'99年より海外文化交流展に触手を伸ばし、日中文化交流展（中国福建省画学院）、中国・日本現代美術展（ニューヨーク）、21世紀日本・内モンゴル国際美術展（内モンゴル国立美術館）、21世紀台湾・日本国際交流展（台湾長流美術館）・北京オリンピック記念祝中日国際交流芸術展（北京故宫博物院）、上海万博開催記念中・日・韓美術作品交流展覧会（上海美術館）を最後に文化交流展は終えた。

日本国内展で最も記憶に残る展覧会は、2009年日本建築美術工芸協会主催の「21世紀・絵画・手の仕事」展である。東京丸の内行幸地下ギャラリーで、通路両側の壁面合計200mに手の仕事にこだわった14人の表現者達展だった。私は大作5点を展示した。この展覧会にご尽力を戴いた加藤貞雄先生（物故）は、図録挨拶文に「彼らは1970～80年代、現代日本美術展、日本国際美術展、安井賞展、など優れた作家が競い合ったコンクールで大賞やそれに準ずる大きな賞の受賞など輝かしいキャリアを持つ」とコメントされている。2016年日本建築美術工芸協会主催あわい展「手の仕事2016」（建築会館）には大作2点を出品した。

2020年はコロナ禍で多くの美術館が閉館となり、品川O美術館でのオリンピック開催記念「21世紀のメッセージ展」は2年越しの準備にもかかわらず開催できずに無念の中止となった。

人間は目に見えないコロナウイルスにあまりにも脆弱だ。ウイルスは国民生活のみならず芸術文化にも大きな影をおとした。コロナウイルスに発表の場を奪われての制作活動は、徒勞であったとしても私は表現者であり続けたい。



手の仕事 2016



手の仕事 2016 原点回帰



CAF2020 作品

# 2020年、コロナ禍でのアート活動



美術家  
日本建築美術工芸協会会員  
長沢晋一

私は2つの美術団体に所属し運営に関わりながら毎年平面作品の制作発表を続けています。ひとつは東京都美術館で9月に開催される公募展、もうひとつが埼玉県立近代美術館で11月開催されるCAFネビュラ展です。

2020年が新型コロナウイルスの感染拡大で地球規模の禍の年となってしまいました。多くの人たちがこの影響を受けることとなった中で、アートの制作発表を繰り返してきた私たちにとっても特別な年となりました。400点近い絵画作品を展示する9月の公募展は、密になる状態で長時間の審査という行程があるために、中止せざるを得ないという判断をしました。春3月から始まり、12月まで東京都美術館や六本木の美術館で開催されていた同様の公募展の多くが中止となり、見えないウィルスとの戦いと先行きの不安という状態の一年でした。

一方で開催にこぎつけ無事終了することができました11月の「2020CAFネビュラ展-埼玉・メキシコ合流点-」を振り返り会を紹介します。CAFはコンテンポラリー・アート・フェスティバル、ネビュラ(Nebula)は星雲を意味します。この名前になったのが2004年、その前身のスタートは1987年になります。

この会には他の会にはないいくつかの特長があります。180名の会員の中から90名程の会員が出品し、そこに新しい会員とその年だけのゲストが加わり、100名規模の展覧会を毎年開催しています。前年の出品作家とおよそ半数近くが入れ替わるというのが大きな特長のひとつです。

次に上記を本展とするならば、それとは別に小規模・中規模で「地域展」と呼ぶ展覧会を日本各地と国外でも不定期に開催しています。いくつかをあげるなら仙台メディアテーク、横浜市民ギャラリー、金沢21世紀美術館、鳥根県立美術館、熊本県立美術館、大津市歴史博物館、渋川市美術館。国外ではパリ、

アメリカミシガン、ラトヴィア、アイスランド、メキシコ等です。CAFの出張展示と言えるかも知れません。

2週間の展示が終わると展覧会は消えてしまう、そこで記録として残す図録作りにこだわりを持って取り組んでいる、それが三つ目の特長と言えるでしょう。

2019年は会員の中から18名がメキシコのグアナフアト大学ギャラリーで、メキシコの作家18名と共に「GUANAJUATO・SAITAMA 合流点」という名の下に展覧会を開催しました。

2020年はその流れで、前年参加したメキシコの作家をCAFネビュラ展に招き、「2020CAFネビュラ展-埼玉・メキシコ合流点」と題し展覧会を開催すると共に、美術館前の公園で、メキシコと日本の文化交流をお祭りのフェスタとして企画し、県の助成を受けるなど今までにない大きな事業として進めていきました。

しかし、メキシコでも日本以上のコロナの感染という事態となり、作家の来日が不可能となったことで作品の空輸、展示、メキシコ作家のアーティストトーク、講演、野外でのワークショップや音楽演奏など、全て日本側会員だけの開催となりました。それに加えて、美術館の感染対策、主催者としての感染対策と困難な中での開催でしたが、多くの会員の協力と各企画を助けていただいた新たな人との出会いによって、日本とメキシコを繋いだ文化交流とアートの発信という2週間を無事終了することが出来ました。

2つの国のアートが埼玉の美術館で合流する、そういう想いで合流点という名前がうまれましたが、それを支える幾筋もの小さな流れがあってそこに合流し、初めて完成することが出来たのだと強く感じた2020年でした。

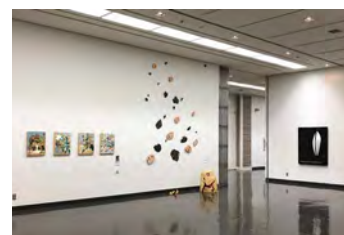
会場 YouTube



展示会場入口



オープニング



展示会場内



野外イベント



# コロナ禍における渋谷東急、池袋東武での個展と aaca サロン

画家  
名古屋学芸大学准教授  
日本建築美術工芸協会会員  
水谷誠孝



2021年2月に池袋東武アートギャラリーで開催された「水谷誠孝 テンペラ画展」は、新型コロナウイルス対策として2回目の緊急事態宣言が発出されたなかでの開催となりました。都道府県をまたいだ移動や感染が拡大している地域への移動は極力控えるとのことで、愛知県に居住する作者としては非常に残念だったのですが会場に赴くことを断念しました。初めての作家不在の個展を開催することになりましたが、東武百貨店やT&Tギャラリー、関係者のみなさまのご協力のもと無事に開催され、平生とは違ったものの無事に開催することができました。

新型コロナウイルスの感染拡大が危ぶまれるなかでも、2020年10月に渋谷東急で個展を開催させていただいた折は、新規感染者数に大幅な変化がみられなかったため会場に赴くことができたのですが、2020年12月に開催されたaacaサロンでは、三菱地所設計の山極氏、インテリアデザイナーの稲垣氏は新宿の会議室から、ガラス工芸家の新實氏、水谷は愛知からZOOMで参加することになりました。サロンでは登壇者や事務局、参加者のみなさまと会場で直接お会いすることができず残念でしたが、会員間の活発な交流がされ、実りあるサロンとなりました。芝山委員長はじめ、事務局の皆様やモデレーターの山極様、ZOOMにご参加いただいたみなさまに感謝申し上げます。

作品のモチーフは、子供の頃に遊んだ遊具であるメリーゴーランドです。メリーゴーランドは、馬術と槍による貴族の馬上試合の練習装置が起源ですが、馬やさまざまな動物が装置のなかで円舞しています。画中には、その装置の規律から解放され、夢幻の空間を動物が駆ける様子が描かれています。技法はテンペラという西洋絵画の古典技法を用いています。この技法は、パネルや下絵の制作からはじまり、パスティーリャとよばれる凹凸を施して純金箔を貼る、絵の具は顔料を練り上げて卵黄を混ぜて着彩するなど、大変な手間と時間のかかる技法ですが、地道に描きためた作品を皆様に観ていただいています。池袋東武アートギャラリーでの個展は非常事態宣言下の2月中旬に開催されたため、来場された皆様の気持ちが少しでも穏やかになっていただけたらと、これまでの自分の作品のテーマにランタンキュラスやチューリップ、アルメリア、ユリなどの春や初夏の花を加えた作品を展示しました。

この状況が解消され、平穏な日々が戻るよう祈るばかりですが、応援していただいた皆様のお力で個展やサロンを開催できたこと、緊急事態宣言下にも関わらず多くの方にご来場、ご参加いただいたことに深く感謝申し上げます。一日も早い新型コロナウイルス感染症の終息と、皆様のご健康とご多幸をお祈り申し上げます。



水谷誠孝テンペラ画展 2021年2月11日～16日 池袋東武アートギャラリー



水谷誠孝洋画展 2020年10月8日～14日 渋谷東急美術画廊



春の花とメリーゴーランド



百合とメリーゴーランド



青空とメリーゴーランドの5頭の馬



動物のメリーゴーランド  
(ライオン・シマウマ・キリン)



# 「土」と「手」と「心」と。 ～ 個展「掌 (ナオノテ)」に寄せて

陶芸作家  
日本建築美術工芸協会会員  
須齋尚子



どんよりした雲がなかなか晴れなくて、心のどこかにつっかえ棒があって。そんな日々が続いているように思います。

昨年だんだんコロナの対応が見えてきて少し良い兆しも感じられた頃、こんな時だからこそ「土」と「手」で生まれる作品たち（の温もり）が何かを届けることが出来たら。作品が本当にささやかでも日々の心の変化の小さなきっかけになり得たら…。ふと湧いたそんな想いとコロナ終息への「合掌」のような願いが、自然の流れかのように今展示へと繋がっていきました。

2021年2月丸1ヶ月に渡り個展「掌 (ナオノテ)」を、横浜元町にて開催させていただきました。願い虚しく止まる事を知らないコロナ、再びの緊急事態宣言下での開催となりました。開催の喜びや感謝と予想出来ない様々な要因への不安や戸惑いが共存していました。

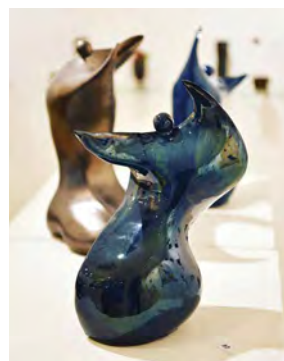
ご縁をいただいたのは開廊3年目、地元元町育ちの若手オーナーが寿司店と一緒に営むユニークなギャラリーです。どんな状況でも柔軟で前向き、作家たちを心から応援してくださる情熱が心強い後押しとなりました。

会期中はおかげさまで天候に恵まれて雨知らず。ガラス張りのギャラリーには美しい陽射しが降り注ぎました。ご来廊の方々のみならず、元町散歩や通り掛かりの人々の視線も浴びて作品たちも嬉しそうに輝きました。この時期だからこそ見えるモノ、感じるコトも多々あり、新たな発見と経験に恵まれた宝物の時間をいただきました。作品で空間を創造できる喜び、本当に幸せに思います。

オンライン化の進む中、発表の場そして形態の変化は避けられません。本来であれば、こうして直に観て感じていただけることがこの上ない喜びに他なりません。写真や映像から、立体作品ゆえの多角度からの様々な表情や土と釉

薬や焼成法により生まれる複雑な色彩の伝達は難しいものです。一方でオンラインによる認知の拡大等の利点もふまえ、良き共存の道を（少しずつでも）模索していくという課題についても殊更に感じた機会でもありました。

Gallery+Sushi 三郎寿司 あまね <https://www.amae.gallery/>  
須齋 尚子 (すさい なおこ) <https://www.miracleeggs.com>



# 絨毯に見る日本の文様の記憶

## ミーリー工房とソレマニエ・フィニ工房展

於：シルクラブ

会期：2021年2月20日～28日

千代田トレーディング(株)ミーリーコレクション代表  
日本建築美術工芸協会会員

ソレマニエ・フィニ アミール



中野にある老舗の呉服屋「山田屋・シルクラブ」では、人間国宝である小宮先生の江戸小紋や菅田屋源兵衛の帯、インドネシアのビンハウスのパティックなどと並んでイランのミーリー工房のペルシャ絨毯を長年紹介してきている。

今年の絨毯展では、2022年に約200年ぶりの復興を目指す京都・祇園祭の鷹山に胴掛けとして収められることが決定し、お披露目会が催されたばかりのミーリー工房とソレマニエ・フィニ工房の絨毯を紹介し、更には日本の文様の記憶をペルシャまで辿ることをテーマとした。

1,000年以上も続く日本の祭の山鉦に昔からペルシャ絨毯が飾られていた事は意外にもあまり知られていない。桃山時代から江戸時代にかけて海外貿易がおこり、舶来のゴブラン織や錦織などが交易品として入ると競って山鉦に用いられるようになり、東インド会社から輸入されたインドとペルシャの絨毯も懸装品として飾られるようになった。山鉦は染織美術館ともいわれる。永い時を経て甦る鷹山を彩る絨毯としてミーリー工房とソレマニエ・フィニ工房の作品が納められることは大変感慨深い。

日本の文様には、ペルシャ起源といわれるものが沢山みられる。樹下動物文や獅子狩文、唐草文、花鳥といったものは飛鳥時代から奈良時代にササン朝ペルシャから唐を介して日本に伝来した。樹下動物文は、聖樹信仰があらわれた意匠である。樹木は、古代より力強い生命力の象徴であり、聖なるものとして信仰の対象であった。樹木の下は楽園を意味しており、対で描かれる動物は聖樹を護っているといわれ、6-7世紀のペルシャ絹織物に既にみられる文様である。獅子狩文はアッシリアからペルシャが発祥とされ、ササン朝ペルシャの遺物や細密画に見られる意匠である。騎乗の人物が振り向きざまに矢を射る姿はパルティアン・ショットといわれる。獅子は権威の象徴であり、王が獅子を射ることは支配力の強さを意味するもの。この文様は、

唐を経て日本へ伝わったものと東ローマ帝国を経て、ヨーロッパへ伝わったものがある。花鳥文は花と鳥を組み合わせた意匠で、吉祥を意味する。葉や蔦、蓮の花が繋がりあって曲線を描き展開する唐草文もまた吉祥や繁栄を意味する文様である。

正倉院の御物のほとんどのものがペルシャ製と当時ペルシャの影響を受けた唐時代の中国で製作されたペルシャスタイルのものだと言われている。

遣唐使たちが最先端の文化を取り入れて日本を発展させていく中で、ペルシャは重要な役割を果たしていた。

ペルシャ起源の文様は日本の風土や思想と融合しながら日本の伝統柄になっていき、今では日本的な文様として認識されるようになっていく。日本の染織のなかに伝統的なペルシャ絨毯の文様を見出すことができるのは当然だろう。

手紡ぎ草木染の伝統的技法を用いて古代から伝わる文様を復活させているミーリー工房とソレマニエ・フィニ工房。このような絨毯工房は残念ながら多くはない。シルクラブがこの2つの工房のペルシャ絨毯だけをお客様に紹介する理由はここにある。

今回の展示会のテーマに因んで獅子狩文や唐草文の帯をつけて着物でいらっしゃるお客様が多いところをみると、文様についての知識がある方が多いのに驚く。展示会場は絨毯の販売展示場ではなく、文化サロンのようにあちこちで歴史や芸術や造形についての会話が聞こえてくる。豊臣秀吉の陣羽織の柄と同じ柄の絨毯を観ながら歴史の話が止まらなくなる。ペルシャのロゼット文と菊の文が一緒なのは偶然か何かの繋がりがあるのかといろんな仮説を立てたりするのも面白い。畳の上に敷き詰められた絨毯と着物の衣桁に掛けられた絨毯を眺めているとシルクロードは今も繋がっている事を実感する。



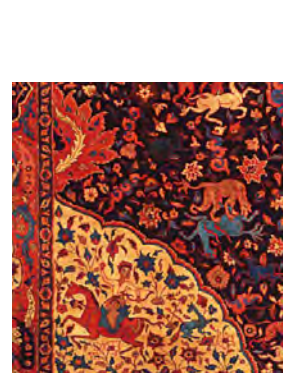
シルクラブ展示風景



京都・祇園祭 南観音山ミーリー工房前掛けとムガール絨毯胴掛け



樹下動物文様絨毯ソレマニエ・フィニ工房カシャン



獅子狩文様 (パルティアン・ショット) 絨毯ミーリー工房タブリーズ



# 新しい生活文化への提案 —閑室・藤焼・床の間—



竹中工務店設計本部  
聴竹居倶楽部代表理事  
日本建築美術工芸協会法人会員  
松隈 章

## ■藤井厚二の建築の枠を超えた「日本の住宅」への提案

藤井は京都帝国大学で自らが始めた建築環境工学を生かして日本の気候風土と日本人の感性に適合した「日本の住宅」の理想形を、実物である自邸「聴竹居」で、さらに、建築環境工学最初期の理論書『日本の住宅』や『聴竹居図案集』などで、主に建築専門家向けに発表し発信し続けた。一方で藤井は建築の提案に留まらず、明治以降、西歐化・近代化の激流の中で忘れられてきた日本の気候風土に育まれた生活文化も見つめなおし、建築と共に特に改善すべきとして次の3つの書籍を発刊し提案している。

## ■和敬清寂を愉しむ「茶室」の進化形としての「閑室」

1932 (昭和7) 年に聴竹居作品集2として田中平安堂から発刊された書籍『藤焼』の最後ページに聴竹居作品集1『閑室』のことが紹介されているが、現時点ではこの聴竹居作品集1は見つかっていない。「藤焼」と同様に、藤井が「閑室」を聴竹居作品集として新しい建築の在り方として提案しようとしていたのだろう。聴竹居作品集1『閑室』として当初考えていたものが、おそらく名称を変えて田中平安堂から1931 (昭和6) 年に発刊した『続聴竹居図案集』で、その序に「閑室」についての想いを記している。

「騒々しい今の世の中では、親しい友と清談を交えたり、瞑想に耽ったりする欲求が屢々 (しばしば) 起こるのは無理からぬ次第です。従って、是に適する室を設ける必要にさまらるるのも亦当然なことだと思います。私は久しく、茶道の古い伝統に拘泥しないで、囚われない和敬清寂を楽しむ室を、試作したいと望んで居りましたが、2、3機を得たので、其の1を続聴竹居図案集と名付

けて、茲 (ここ) に拙案を発表します。私と同じ希望を持って居る人々の参考でもなれば幸甚の至です。」茶室建築を「我國民の間に生まれてそのまま発達した純粹の日本建築である。意匠の優秀、用意周到なるには驚嘆の外はなく、其道の奥義を究めたる古人を追慕するの念は愈々 (いよいよ) 深くなって来る。」としながらも、現代の建築として完備するには、照明の意匠と換気を完全にすることが最も改善すべき問題だとしている (出典「新しき茶室建築」藤井厚二)。

聴竹居に遺る「閑室」は、親しい友と清談を交えたり、瞑想に耽ったりできる和敬清寂を楽しむ室が実現され、藤井自身も実際にそのように使っていたと次女の小西章子さんから伝え聞いている。

## ■建築材料に留まらない建物に調和した陶磁器「藤焼」

聴竹居作品集2として発刊した書籍『藤焼』のはじめに「藤焼について」としてその想いを記している。

「建築上の私の主張を表はす一助として、陶磁器の試作を創めてから、既に10年余りを経過しました。建物の壁面或いは床面などに貼り付ける陶板類にのみならず、日常生活に使用する陶磁器も、其の建物の無いように調和するものを造りたいと云うのが私の希望です。」

「温雅にして荘重、色彩は頗る豊富ですから、製作に就いて深い経験を積み、彫刻の材料として自由に利用することが出来れば、極めて優秀なる藝術品をも造り得ると思ひます。殊に之が和風建築の室内に於ける如く、清楚淡雅なる環境に於て鑑賞せらるる場合にあっては、著しく其の特長を發揮します。」

作品集には、「浴室用の陶板」から「花器」「茶碗」「菓子鉢」「電熱器」「飛鶴の釣香爐」など様々な36も



閑室下段の間・写真\_藤井厚二『続聴竹居図案集』より



閑室・木版画\_藤井厚二『続聴竹居図案集』



陶板と序文\_藤井厚二『聴竹居作品集二』より



の作品が写真で紹介されている。建築材料から日常雑器、最先端の電気ストーブに至るまで「日本の住宅」に「陶磁器」を調和させていこうとしていたのである。

### ■洋風の生活スタイルにも馴染ませた新しい「床の間」

藤井が生花を壽子夫人とともに学んだ去風流家元の西川一草亭は、自然の心に随って自然の主体性を表現する花を標榜し、1926（大正15）年、枯渴する学究達に“日本的なもの”への傾斜を促し日本文化を語り合うサロンを提供する庵居「去風洞」を開いた。そこには、夏目漱石、富岡鉄斎、浅井忠をはじめ多くの文化人・知識人が集っていた。流の機関誌『瓶史』の1931（昭和6）年4月の春号には藤井も「床の間」の論考を寄せ、西川の講和を引用しながら以下のように記している。

「『つまり生花の要領は何であるかと云いますと、私は結局少しの物を生かして用いると云う事に帰するだろうと思います』とありますが、之は現代のすべての道に対する要点で、（中略）建築に於ても、僅かな材料を適当に使用して、最も大なる効果をあげればそれでよい訳ですが、（中略）何も置かないで、単に花器に一枝の花を挿して置くのみで、高雅なる気分の横溢するような床の間の造らざることを切に希望いたします」。

藤井は、「床の間」が西洋の暖炉と対照して日本の住宅建築では室内の中心とした上で、空間に変化を与えるために「最も効果のある方法は、平面で区画した種々の凸凹のある空間を造ることで、即ち畳の一枚分或いは二枚分の面積に於て、床の間を設ければ、種々の面白い変化を与えます」としている。さらに、床の間の歴史に触れた後、「現今の普通の住宅で造られている床の間は面白みが少しもなく、一定の型にはまって、極めて単調に

陥り冷たい感を与えるものが多く、隔々の変化を求めたものは複雑で騒々しい感を与えます」としている。

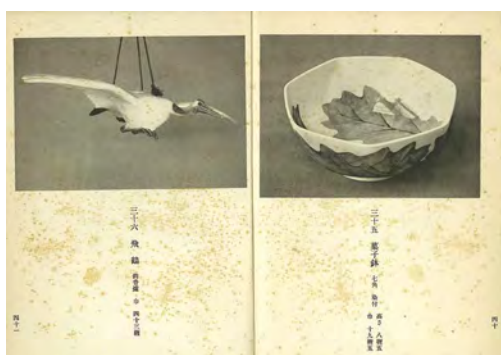
藤井が設計し実現した床の間だけを26枚の写真で収録した書籍『床の間』を1934（昭和9）年に発刊している。その序には「近時、床の間が我国住宅建築の一大特長として深く考究されようとする傾向にあるのは、その動機がいづれにあるにしても、洵に喜ばしい次第です。」と記している。藤井は、「日本の住宅」の空間として「床の間」の重要性を主張すると同時に、西川一草亭に学んだ簡素で豊かと言う基本的な美意識を提示したのである。

### ■変化ある四季の中に生活文化を育んできた日本人

日本人は古来から恵まれた自然の織り成す四季の変化に美を発見し、衣・食・住に取り込み生活文化を育んできた。「茶」「花」そして「陶芸」を自ら嗜み、京都や奈良の古建築だけではなく世界の建築を十分に探求していた藤井は、この美意識こそが、世界に通じる新しい「日本の住宅」創造の起点になると確信していたのだろう。

現代の住宅は家電製品をはじめ溢れるばかりのあらゆるモノ、そして、様々な情報に専有されている。しかし、がらんとした「聴竹居」に佇んでいると、西川一草亭の言葉「少しの物を生かして用いると云う事に帰する」を思い起こしこれでいいんだと思えてくる。ゆったりとした時間がながれ、四季豊かな自然に抱かれ、空間が息づいている「聴竹居」。いま、本当に考えなければならないことは、簡素で豊かを、人間形成の基本単位である住宅に取り戻すことではないだろうか。

コロナ禍の中にある現在、あらためて、日本本来の生活を見つめなおす好機としたい。



菓子鉢と飛鶴（釣香爐）\_藤井厚二『聴竹居作品集二』より



花を生けた「藤焼」の花瓶



閑室の床の間\_藤井厚二『床の間』より



座敷客室の床の間\_藤井厚二『床の間』より

# 株式会社山下設計 Part2

広報委員会

## 都市と自然が融合する立川の特徴を生かした 独自性・持続性の高い街づくり

GREEN SPRINGS は、JR 立川駅北側の国営昭和記念公園と多摩都市モノレール線の間に位置する南北約 400m・東西約 100m の敷地に計画された複合施設です立川駅周辺は、戦中には陸軍飛行場や関連工場が集積され、戦後は駅ビルやファール地区などの大規模開発事業により街区が形成され、結果、現在のようなメガスケールの都市景観が作り出されました。敷地周辺においても多摩都市モノレール高架下の歩行者専用道＝サンサンロードや、昭和記念公園など、大きなオープンスペースはあるものの、ヒューマンスケールのパブリックスペースは不足しています。

立川にはもう一つ特徴があります。立川は東京西部に位置する人口約 18 万人の自治体です。新宿から電車で約 25 分の距離に位置し、都心とも郊外とも言えない固有の性格を持っています。昼夜間人口には大差がなく、夜間人口に比べて、昼間人口の方が多いため特徴です。これは立川が

東京都心のベッドタウンと、多摩地域における中核都市という 2 つの側面を持っていることを意味します。

私達はこの点に着目し、立川の持続的発展に寄与する施設づくりを目指しました。二面性を持つ属性の違いは、多世代間の交流を生み出すとともに、平日・週末、昼間・夜間を問わず、街に賑わいを生み出すことができます。具体的には、オフィス、商業施設、ホテル、地域金融機関に加え、ホールや美術館、こども知育施設などの文化施設、さらには保育所などを内包し、地域に不足する公共的サービスの一部を本施設が担うこととしました。

施設は 1 階に駐車場を集約し、人工地盤となる 2 階レベルに街区の中心的な存在となる緑豊かな広場を計画しました。広場を囲むように機能ごとに分節化された施設を配置しています。これにより郊外型のショッピングセンターに見られがちな膨大な駐車場を都市の景観から消失させるとともに、国営昭和記念公園の緑と街区内の緑を視覚的に繋ぎあわせています。



S 棟側から広場を見下ろす。X 軸によって緩やかに広場を分節化しており、軸線に沿って様々なシークエンスを体感できる



街区全体を見下す。1 階に駐車場を集約し、2 階の人工地盤面の中央に約 1ha の広場を設け、各棟はそれを囲むように配置



北西側から広場を見下ろす。広場中央には、ピオトープが広がる。広場のベンチや園路には、特殊な加熱処理をされた多摩産の木材が使用されている



広場から N 棟側を見る。X 型の動線はカスケードへつながり空へ続いていくようなシークエンスをもたらす



W2 棟 2 階。商業施設と一体となっているリビングルーム。広場と商業をつなぐ緑側のような居場所



W1 棟 (ホテル) 2 階エントランスロビー。テントをモチーフにした天井が昭和記念公園の緑とつながる開放的な空間を演出



N 棟ホール。客席後方の 3 枚のスライディングウォールを開放することで屋外広場と一体利用できる



**建築概要**

名称：GREEN SPRINGS (グリーンスプリングス)  
 所在地：東京都立川市緑町 3-1,3-3  
 主用途：事務所、信用金庫、ホテル、店舗、美術館、  
 保育所、駐車場  
 建築主：立飛ホールディングス  
 事業協力者：多摩信用金庫  
 マスターデザインアーキテクト：スタジオタクシミズ  
 マスターデザインランドスケープアーキテクト  
 :ランドスケープ・プラス  
 プロジェクトマネジメント：フレームワークス、  
 山下設計

**[A-2地区]**

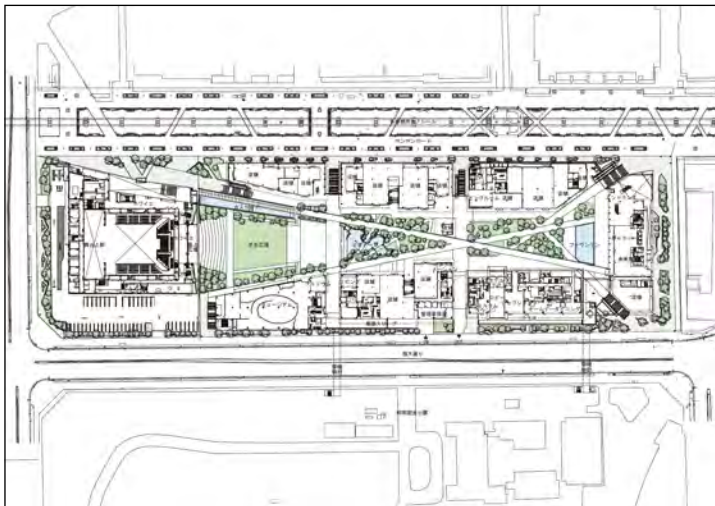
設計：山下設計・大林組設計共同企業体+清水建設  
 施工：W・E棟 大林組、S棟  
 清水建設・中島建設・中村建設 JV  
 敷地面積：28,899.28㎡  
 建築面積：24,440.79㎡  
 延床面積：64,307.06㎡  
 階数：地下1階 地上11階  
 主体構造：S造 一部RC造、CFT造

**[A-3地区]**

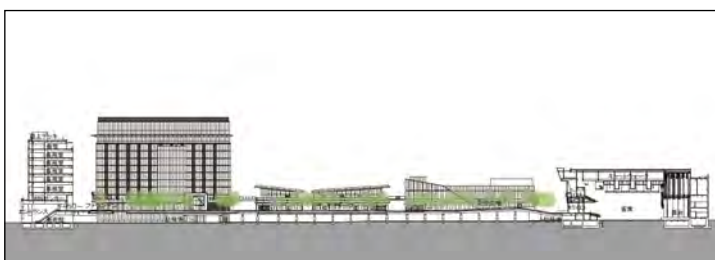
設計：山下設計  
 施工：大林組  
 敷地面積：10,000.92㎡  
 建築面積：5,535.46㎡  
 延床面積：11,863.25㎡  
 階数：地上4階  
 主体構造：SRC造 一部S造、RC造

完成：2020年2月

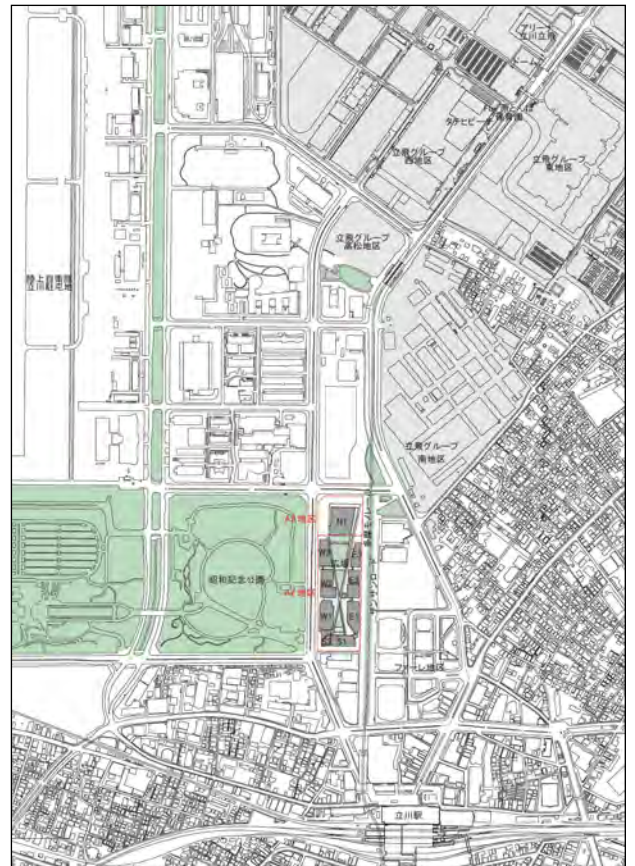
(データ提供：山下設計 本多 陽)



2階統合平面図



南北断面図+ランドスケープ



配置図

# 東京工業大学 大岡山キャンパス

鹿島建設株式会社  
専務執行役員建築設計本部長  
日本建築美術工芸協会法人会員  
北 典夫



私は高校時代を広島県の福山で過ごした。進むべき道は絵画か音楽か、選択肢はこの二つと思っていたが、3年生の夏休みになっても定まらない。当時、仲間とロックバンドを組んでいたが、その練習の場であった寺の次男である友人が、それなら建築家という道もあると奨めてくれた。大工はともかく、建築家という職能についてはまったく知識がなかったが、テレビ・コマーシャルで「違いが分かる男」清家清の存在を知っていたこともあって、東京工業大学（英文略称 TIT、以下、東工大）の建築学科に願書を出すことにした。1976年のことである。その友人は今では四国の浄土真宗の大寺の住職になっている。彼の一言で今があると思えば、「ありがとう」とお礼を言いたい。

入学して、東工大のメインキャンパス・大岡山に通うことになった。本館前のキャンパスの中心軸（以下、プロムナード）に接し、西側に下る大きなスロープがある。そこは芝の広場となっていて、私がおもったところ和む場所だった。谷口吉郎設計、1958年竣工の創立70周年記念講堂はこの広場の北側にあり、長手方向のファサードを見せている。斜面を生かした控えめな佇まいが好ましく、ロビーには縦格子の連なりから入り込む外光による陰影が清らかで心地よい空間を生み出していた。

1年生のときはジャズ研究会に入部して練習に明け暮れ、2年生のときは仲間とブリティッシュロックバンドを組んだが、その練習場であり、成果を発表するライブ会場でもあったのがこの記念講堂だった。先輩に野口秀世さんがいた。ヴォーカル担当で、練習ではいつも先頭に立っていた。熱血漢の彼は、建築についても想い入れが深く、私を急き立てるようにさまざまな情報や知識を注ぎ込んでくれた。ゲーディオン、ゼーデルマイヤーの建築論・美術論に始まり、ルドルフ・シュタイナーの教育論にいたるまで、彼に薦め

られ、むさぼるように読んだ本は今も書棚を占めている。彼は修士課程を卒業後、久米設計に入り、北上市文化交流センター・さくらホール（日本建築学会賞）、山梨県立図書館などの設計に携わった。それらに共通するのは、かたちをデザインするのではなく、人間の感覚を拠りどころにしながら、行為そのものをデザインしようとする姿勢だった。2015年、これからさらなる飛躍が期待される時に逝去されたのは、残念でならない。

プロムナードをはさんで、記念講堂の斜向かいにあるのが事務局1号棟（旧・管理棟）である。清家清設計、1967年竣工。コンクリート型枠の木目を生かした外壁、プロフィリットガラスの多用、集成材のがっしりした階段手摺など、装飾的でありながら簡素でもある表現は固有の魅力を放ち、見飽きることがなかった。

入学したときには谷口先生はとうに退官されていたし、清家先生とは数回の講義を受けただけの接触到終わったが、それぞれの建築は私にとっては言わば初めての建築・空間体験といって良く、無意識のうちに大きな影響を受けた。

一般教養課程の図学の先生は篠原一男だった。図学の基本を講義する姿は、穏やかで淡々としていた。その人が建築家として先鋭的な設計を続けざまに発表し、熱気ある建築論の渦の中心に立つ一人であることを知ったのは専門課程に進んでからのことだったが、以降は新たな作品が発表されるたびに、未知の領域に果敢に分け入っていく姿勢に感銘を受け続けた。

谷口吉郎、清家清、篠原一男。3人の先達は、建築設計の道に進んだ私にとって巨峰ともいべき存在となり、ときにその偉大さに圧倒され、ときにその高みに少しでも近づくべく勇気づけられてきた。



創立70周年記念講堂 1958



事務局1号棟（旧・管理棟）1967



東工大の始まりは、1881年、明治政府により設立された東京職工学校で、蔵前にあったが、1923年の関東大震災で壊滅的な被害を受け、大岡山に敷地を得て移転、現在に至っている。移転の経緯から、キャンパスの境界は入り組み、鉄道や線路で分断されていた。起伏のある不定形のキャンパスにまとまりを与えるべく努力が続けられていたが、目に見えて具体化したのは私の卒業後のことだった。

1987年、創立百周年記念事業の一環として正門の脇に百年記念館が竣工した。篠原一男設計。東工大建築学科発行の冊子には「都市の非統一的なシステムを参照し、屈曲した直径11メートルの半円形シリンダーが建物に貫入し、空中に浮遊したイメージが具現化された」とある。巷間、ガンダムと称されるその立ち姿は、それまでのキャンパス内の建築を根こそぎ置き去りにするほどの前衛性を帯びていた。自らの表現において数度の脱皮を繰り返してきた建築家・篠原一男にとって、究極の到達点だったと言えよう。

1997年には東急大井町線・目黒線の地下化が完了し、念願だったキャンパスの分断解消に展望が開けた。2006年には、本館をアイストップとするプロムナードの整備が行われた。桜の根を保護するためにデッキを配し、アスファルトをはがして芝生を植え、歩行者専用通路として、キャンパスの中心軸としての体裁が整えられた。続いて、蔵前会館（同窓会館＋会議室）、附属図書館、さらに今年になってHisao & Hiroko Taki Plazaが竣工。いずれの建築もプロムナードの軸線を強化する方向で設計がなされている。このように急速に整備が進められてきたが、近い将来、地下化された鉄道軌道を跨ぐかたちでプロムナードが延伸され、本館から蔵前会館までが一直線に繋がると、キャンパス再編は一応の完結を見ることになる。

2012年度から2年間、建築学科3年生の設計製図を担当する非常勤講師を務めた。社会に出てから、このようなかたちでキャンパスを訪れ、澁淵とした学生たちと交わる機会は貴重で、大いに刺激を受けた。私のころは1割に満たなかった女子学生が今では4割近くを占めている。

設計製図の優秀作は、TIT建築設計教育研究会が発行する年刊「ka（華）」に掲載される。この研究会は1990年、OBの山下和正（当時教授）、林昌二（同日建設）、中島隆（同鹿島建設）ほかを中心に設立され、卒業生の任意参加による組織で、学生の設計能力の向上を側面から支援するとともに会員相互の交流促進を目的とし、「ka」の発行をはじめ、充実した活動が継続されている。

ところで、東工大にはほかにキャンパスが二つある。

一つは横浜市緑区長津田にあるすずかけ台キャンパスで、1975年～1980年に主要な施設が建設されている。ここでは学部基礎を置かない新構想の大学院研究科が創設され、境界領域の教育・研究が実施されている。

もう一つは、港区田町駅の近くの田町キャンパスで、現在は長い歴史を有する附属科学技術高等学校や大学院レベルの教育を行う社会人アカデミーなどがある。この敷地を対象に、東工大と民間事業者が連携して、国内外の企業・大学が集積する国際的な産業・研究拠点に再編する計画が始まっている。グランドオープンは2032年の予定。私も設計者の一員として参画し、微力ながら「新たな価値を生み続ける知の象徴となり、世界を牽引するイノベーション・ウォーターフロントの拠点づくり」に取り組む所存だ。

竣工時の建築の写真を掲載するにあたり、東工大の関係者のみなさまにご尽力いただきました。心より感謝いたします。



百年記念館 1987



蔵前会館 2009



東工大附属図書館 2011 撮影石黒守

## 会員増強委員会だより

### 第3回 aaca サロンの開催報告

# 『街とのインターフェイス・ 人とのインターフェイス』

新實広記(ガラス工芸家)・水谷誠孝(洋画家)・稲垣 誠(インテリアデザイナー) 山極裕史

Urbanist  
会員増強委員会委員  
展示委員会委員  
三菱地所設計  
日本建築美術工芸協会会員



第3回の aaca サロンはガラス工芸家の新實広記さんと新会員の洋画家の水谷誠孝さん・インテリアデザイナーの稲垣誠さんに「まちとのインターフェイス・人とのインターフェイス」というテーマで皆さんの活動や作品を紹介していただきました。

インテリア・ガラス・絵画と言う異なる次元で活動されていますが、作品の共通概念として空間あるいは、それぞれの作品に触れる・見るなど人の五感を通した表現の中で「まちや人とのつながり」に焦点を当てディスカッションをして頂きました。

今回は Covid-19 対策として大成建設の会議室を借り、東京から稲垣さんと私が参加、名古屋在住の新實さん水谷さんは在宅でリモートにより視聴者に配信を行いました。

新實さんの VESSEL という作品シリーズは美術館やギャラリーの他、パブリックな空間に置かれている作品が多くあります。ガラス鑄造の作品で比較的小型のものから全長 3M の作品まで様々です。作品の制作過程も紹介され、無垢のガラスの作品の迫力が生み出されるまでの過程に最大限の注意力と多大な労力と時間がかかることを知らされました。また、作品を依頼者とともにディスカッションし作品にテーマを与え創り出すという取り組みにも共感を覚えます。

水谷さんの作品はテンペラ画で日本では非常に珍しい西洋絵画の古典技法を用いた作品です。制作過程をパネルの制作、下絵、顔料、金箔貼り、描画など細かく説明され非常に興味を引く内容でした。作品はメリーゴーランドをモチーフとした作品が多く、大きさも多種多様なもので、ギャラリーから個人宅、パブリックな室内など幅広い場所に展示されています。また、油彩画に比べ退色がなく、いつまでも鮮やかな色彩が放たれるのが特徴です。ギャラリーで実際の作品を拝見した印象は日本画の琳派をイメージさせられる金色とほかの色のコントラストや美しさが印象的でした。

稲垣さんの作品はインテリアデザイナーで、先のお二人と異なります。現在はサドルという事務所を立ち上げ活躍中ですが、丹青社で様々な用途のインテリアデザインに携わり、仲間たちと立ち上げたデザインユニット AUN2H4 としてプロダクトデザインを手掛け、ミラノでのドムスアカデミーミラノサローネへの挑戦、ゲンスラーでの経験など多様な活動を展開してきた中で様々な作品を紹介していただきました。中でも学芸員資格を活かした博物館の展示空間をデザインした作品は展示物の配置や動き、見せ方を含めて空間が一体化し、非常に興味を引く作品でした。

作品紹介後、「まちとのインターフェイス・人とのインターフェイス」と言うテーマでディスカッションをして頂きました。

新實さんは、パブリックな場所の作品は「建築や自然、人、歴史」と共鳴し合う空間として作ることを目指し、人それぞれの関わり方でアートに触れるきっかけになればと良いし、パブリックであるが故のノイズも積極的に取り入れ、それを美に変えていくことが作家の役割であるという話をされました。

水谷さんからは個人の思いが作品とのつながりを深め生活の一部となり、待合室や画廊のウィンドウやロビーなど様々な目に触れる場所では、作品が多くの人に触れることで訴求力が高まり、これからの「人中心の社会」で人間が本来持つ感性を刺激し、社会を構成する一人ひとりの人間が活力をもって生きるということにつながるのではないかという話がありました。

稲垣さんからはホテルにおけるアートは空間の質を高めるために欠かせない要素であり、展示空間ではインテリアデザインを勝たせないことが第一であり、イタリアの経験で言えるのはアートとデザインの境界がなく普通の生活に取り込まれているという文化性の違いにも言及されました。

3人の方から貴重な意見を頂き、これからの「人中心の社会」を考える中で、アートやデザインは、直接、人の五感や六感に作用し益々、重要な役割を担う気がします。aaca サロンでは美術／工芸／建築など様々な分野で活躍されている方々との交流を促進し、各分野でさらなる人間の豊かさ／街の豊かさ／生活の豊かさを高めるために活動を行っています。さらに入会者が増え異分野交流が活発となることを期待しています。



Carllion Café AUN2H4 稲垣誠

講演者の  
作品



「メリーゴーランドの情景」(1226×470mm)水谷誠孝



Salone Del Mobile, Satellite<sup>®</sup> ミラノサローネ AUN2H4 稲垣誠



「百合とメリーゴーランド」(530×652mm)水谷誠孝



「VESSEL」大手門・JXビル／大手町 新實広記



「VESSEL 一光のうつわ」新實広記



## フォーラム委員会だより

# 第 197 回フォーラム開催報告

## 空間を演出し彩るアート

aaca Forum オンラインセミナーレポート

アールライフスタイリスト  
アーティスト  
株式会社エーアンドエム代表  
藤田あかね



空間を意識したアートづくり。その作品は空間と溶け込みすぎず、尚且つおびやかすものでなく、装飾としての存在というよりその空間のスパイスとなり静かに何かを伝えるものでありたい。これは私たちがアート制作する際の信条の一つであります。私たちが常日頃気をつけていることを施工例とともにお伝えし、活動などのお話をさせていただきました。お申込み人数は 80 名。ズームにて 1 時間半を飽きの来ないよう緩急をつけたものにしました。

コミッションワークとは、委託制作のアートのことを言います。作家や、オーダーする側にとっても様々な委託制作に対する形があります。依頼をいただく以上、リクエストや制限がある中でどんなことが表現でき、生み出すことができるかは、その作家の力量や姿勢が試されるものになります。依頼側と、作家側との相互のコミュニケーションと信頼、そこから生まれる心地よい科学変化が美しく形成された時に唯一無二の空間が生まれます。

ヒアリングすべきことは、施設のコンセプトやターゲット、インテリア詳細にわたり多くあります。主軸となるキーがあればそれを元に私たちはスタディーを重ねていきます。その施設のブランドはどのようなものか、立地はどうか。その周りに見える景色はどうか。色々脳内でコラージュしていきながら、作家独自の視点で思考を深めていき、エスキスの制作をスタートします。実際に制作される際には、インテリアの要素を元に色作りも進めていきます。ここが実は重要で、空間のトーンに馴染ませるか、はたまたあえて引き立たせるものにするかは空間のコンセプトにより大きく変わってきます。デザイナーと、壁色などをアートに合わせ変更をしたりして空間を作り上げていきます。作品が空間に設置されると、パズルの最終ピースのようにピッタリとハマるその瞬間が訪れます。ご依頼時から納品まで、オーナー、デザイナー、そこを訪れる人々、と制作者の想いを行ったり来たりしながら常に私たちは自問自答を繰り返し制作を続けていきます。

私たちがで常日頃気をつけていることが 5 つ。

- ①作家独自のオリジナリティー。
- ②空間との程よい調和。
- ③施設のコンセプトの具現化。
- ④アートが装飾的にならないこと。
- ⑤アーティストの独りよがりにならないこと。

実はこの中の④と⑤の部分は絶妙なバランス感覚が必要です。個々のバランスを食い違おうと単なる飾りとなってしまい、メッセージが伝わらないものになってしまったり、また作品だけが空間を無視し突出したものになってしまい空間として圧迫感のあるものになってしまいます。絶妙にアートと空間が呼応し、佇む人に存在を静かに投げかけるものが私たちの理想です。

アートと街や人、場所をつなげるという活動も一つの大切なことで、発見と学びの場と捉えています。様々なアーティストと、不特定多数の人々がアートをきっかけにそれぞれの世界を広める思考はアートの存在や、見せ方を模索する柔軟な姿勢に繋がります。自身の展覧会などを通して表現の軸を見つめ発展させていく活動とは違うベクトルのようでありながら双方向で引き合い良い力になると感じます。

今回は、セミナー自体を 2 部構成にして、Q&A と、中継をはさみました。アトリエ中継は 2 回、また、街中アート活動の場に行って中継。セミナー中のアンケートは 3 回。また、終了後のアンケートも行いました。参加者は様々な職業の方が参加。アーティスト、ゼネコン設計、インテリアコーディネーター、建築家、WEB 制作者、主婦や、メーカーまで多岐にわたり、最も興味を持たれた内容としては制作過程の説明、チームで制作している所の二つが最も多く、普段見れていない部分に対するものでした。私たちもセミナーを通して自身の仕事を見直す良い機会となりました。



アートの研修 (アトリエにて)



新宿高島屋、天井画制作風景



セミナー中、アトリエを実況中継で紹介



2020 年エドロックでのソーシャルディスタンスを意識したインスタレーション

表彰・広報委員会より

第30回 AACAA 賞写真集 P5・会報 89号 P27 に作者・撮影者氏名に編集違いがありました。ご関係の皆様にお詫び申し上げます。

事務局だより

— 訃報 — 心からお悔やみ申し上げます。

個人会員 近藤正一氏 4月23日逝去 1930年生 享年90歳 株式会社 アール・アイ・エー名誉会長



履歴 1954年 早稲田大学第一理工学部卒業 RIA 建築総合研究所 入社  
 1975年 株式会社 アール・アイ・エー代表取締役社長 就任  
 2001年 同社 取締役会長 就任  
 2005年 同社 名誉会長 就任  
 協会歴 1989～2021年 日本建築美術工芸協会会員  
 作品 天王洲総合開発計画、二子玉川東地区再開発事業（二子玉川ライズ）、  
 渋谷 Q FRONT、笠間地方広域斎場、東京山手教会、他 住宅多数  
 著書 RIA 住宅の会編集「疾風のごとく駆け抜けた RIA 住宅のづくり」 1953～69」

■新入会員・会員の異動 2021年2月～2021年5月(敬称略)

個人情報保護法の定めにより、個人会員は氏名・活動分野、法人会員は会社名・担当者氏名・会社住所を記載します。

《新入会員》

個人会員	竹内春香 (埼玉画廊)
------	-------------

法人会員	UDS(株)	代表取締役社長 黒田哲二 担当 COMPATH 事業部 富山晃一	〒150-0001 渋谷区西新宿 7-5-20 TEL.03-5413-3941
------	--------	---	--

《会員の移動》

個人会員	改名	(新)丸山耽奎為	(旧)丸山祐音雲
	住所変更	成瀬輝一	〒870-0026 大分市金池町
		中島三枝子	〒150-0021 渋谷区恵比寿西
		石井 春	〒255-0003 神奈川県中郡大磯町大磯
会員交代	(新)中橋政人	(旧)鈴木 聡	
法人会員	担当者 変更	芦原建築設計事務所	(新)芦原太郎 (前)芦原有紀
		宇部建設資材販売(株)	(新)原田淳哉 (前)廣角京一
		(株)NTTファシリティーズ	(新)佐竹浩二 (前)三浦伸明
		(株)織絵	(新)加茂友里 (前)草薙拓巳
		(株)川島織物セルコン	(新)岩永貴博 (前)那須田実
		(株)環境デザイン研究所	(新)仙田 有 (前)佐藤哲士
		(株)小松物産	(新)馬 驍 (前)山崎賢治
		(株)佐藤総合計画	(新)鳴海和人 (前)弓崎浩一

法人会員	担当者 変更	(株)サンゲツ	(新)鈴木正義 (前)吉村弘幸
		太陽工業(株)	(新)中島康友 (前)溝辺 陽
		フィグラ(株)	(新)間庭和弘 (前)森川泰彦
		(株)三菱地所	(新)渡部哲也 (前)遊佐謙太郎
		(株)三菱地所設計	(新)大菅 宏 (前)立原里樹
		みはし(株)	(新)加藤 慶 (前)青木勇哉
	住所変更	明治安田生命保険相互会社	(新)川鶴倫裕 (前)小崎泰史
矢橋大理石(株)東京支店		(新)矢橋晋太郎 (前)谷本 弘	
		森ビル(株)	(新)長谷川諭 (前)本 耕一
住所変更	戸田建設(株)	〒108-0023 港区芝浦3-9-1	

編集後記

会報90号から、表紙を日本建築美術工芸協会賞(AACA賞)受賞作品で飾ることになりました。日本建築美術工芸協会賞は、建築家、美術家、工芸家たちの連携・協力によって優れた芸術的環境を創造した、あるいは優れた芸術的環境に関し多大な業績があった個人またはグループが選ばれますが、第一回の受賞作品東京都多摩動物公園昆虫生態園昆虫ホールの大大理石モザイク作品は、正に「建築の中で、作品により建物自体が別の命を生み出す」かのように、昆虫を中心とした命の場が創造されています。(飯田郷介)



発行人 会長 岡本 賢  
 発行 一般社団法人 日本建築美術工芸協会  
 〒108-0014  
 東京都港区芝 5-26-20 建築会館6階  
 TEL 03-3457-7998 FAX 03-3457-1598  
 URL http://www.aacajp.com  
 E-Mail info@aacajp.com

編集 広報委員会  
 委員長 飯田郷介  
 副委員長 野口真理 田島一宏  
 委員 五十嵐通代 置鮎早智枝 工藤康博  
 竹生田 正 中村弘子 松本治子  
 三上紀子 森田高年 山崎和子  
 山崎輝子 山下治子 吉田 誠  
 編集制作協力 株式会社 アム・プロモーション